東亜同文書院記念基金会ニュース

第26号　2024年4月～2025年3月



Contents

基金会だより

第31回 東亜同文書院記念基金会授賞式 －02
東亜同文書院記念基金特別奨励賞・栄誉賞授与 －19
本間先生欽慕の会・荒尾東方斎先生追悼式・山洲根津先生墓参 －20
東亜同文書院大学記念センター活動レポート －22

発行／愛知大学 東亜同文書院大学記念センター

第31回東亜同文書院記念基金会授賞式

第31回東亜同文書院記念基金会授賞式が２０２５年3月5日、霞山会館にて催されました。

この顕彰事業は、東亜同文書院記念基金会によるものであり、その目的は、東亜同文書院およびその経営母体であった東亜同文会にかかわる研究や調査成果、および啓蒙的活動のうち、顕著な実績を認められた個人、団体や組織を顕彰するものです。東亜同文書院記念基金会を構成する滬友会（書院同窓会。２００７年解散）、霞山会、愛知大学東亜同文書院大学記念センターからの推薦により同理事会において選出しており、１９９３年の第１回表彰以来、本年度で第31回目となります。

これまで、書院生の大旅行に関する研究成果や東亜同文会の資料に基づく研究、東亜同文書院や東亜同文会の出版物のデータベース化事業、東亜同文書院生や卒業生による日中交流に関するメディア報道、その他日中交流の活発な活動などの成果に対して顕彰してまいりました。

第31回となる今回は、功労賞として髙井和伸氏と成瀬さよ子氏が選ばれました。

〔功労賞受賞者〕

髙井　和伸　氏

愛知大学本間喜一学長からの示唆を受け東亜同文書院大学予科および愛知大学予科の寮歌の伝統をふまえ寮歌振興会へ加入し、両校予科の歴史と存在を広く知らしめるとともに、そのすぐれた指導性が高く評価され、現在は日本寮歌振興会の会長に就任され、日本の寮歌の普及と振興に力強く大きく貢献されています。

〔功労賞受賞者〕

成瀬　さよ子　氏

愛知大学図書館司書として永年にわたり務める中で、東亜同文書院に多大な関心を持たれ、とくに退職後は戦前の日中戦争下の上海で焼失され再建された東亜同文書院図書館の急増した図書の蔵書や経費の変容をさまざまな諸資料から求め収集され、このほど『上海東亜同文書院大学図書館の世界―その激動の軌跡から解き明かす―』を刊行され、関係者から多大な注目を集めています。

〔授賞式挨拶〕

広瀬　裕樹　氏

（東亜同文書院記念基金会会長・愛知大学学長）

皆様、おはようございます。ただ今ご紹介にあずかりました基金会の会長を務めております広瀬でございます。本日は年度末のお忙しいところ、また大変お足元のよろしくない中、「東亜同文書院記念基金会」の授賞式にご参集賜り誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。今回はお二人の方が受賞をすることとなりました。この基金の趣旨につきましては先ほどご説明ありました通りですが、東亜同文書院の経営母体であった東亜同文会に関わる研究成果、あるいは顕著な実績を上げられた個人を表彰するということになっております。

お二人のご功績に関しましては、この後ご推薦の中で詳しくご説明いただけることとなりますが、いずれもが、東亜同文書院によってもたらされたもの、そのものを直接に扱ったものではないと思います。しかし、髙井様に守っていただいた寮歌によりまして、当時の学生の考え方や気概などを私たちは

手に取るように共有することができます。また、成瀬様の図書館のご研究により、当時の勉学研究の生々しい様子を私たちは知ることができます。



つまり、お二人のご功績は、間接的でありながら、いずれもがかえって東亜同文書院の姿を現在に活き活きと伝えてくれるものであります。そのことを私は大変興味深く感じているところでございます。東亜同文書院、そして東亜同文会については、未だ正確な評価が定着しているとは言えないような状況でございます。先人たちの成果が歴史の陰にまみれこまないように丁寧に拾い出して光を当てることが私たちの使命なのだと存じております。その意味では、本日のお二人のご業績もまさに本会の本意とする大変貴重なものと言えましょう。お二人とも是非ご健康にご留意いただき、今後もご活躍を深められることを願ってやみません。簡単ではございますが、お二人の受賞に対しまして改めて心からお祝い申し上げますと共に私の挨拶と代えさせていただければと思います。どうもありがとうございます。

〔功労賞祝辞〕

阿部　純一　氏（霞山会理事長）

皆様、おはようございます。

ただ今ご紹介にあずかりました、霞山会の理事長を務めております阿部でございます。

本日は、「東亜同文書院記念基金会」第31回授賞式が、こうして無事に開催されましたことを、大変嬉しく思っております。広瀬会長をはじめ、事務局の皆様のご尽力の賜物と存じます。心より御礼申し上げます。

さて、まずは今回、功労賞を受賞されました髙井和伸様、成瀬さよ子様のお二方に、心よりお祝いを申し上げます。

まず髙井様につきましては、ここではあえて「髙井先生」とお呼びさせていただきます。髙井先生には、霞山会が旧霞山ビルに所在していた頃から、弁護士事務所をオフィステナントとして開設いただいておりました。その後、このコモンゲート西館が完成してからもしばらくの間、事務所を構えていただき、霞山会の財政に長くご貢献いただきましたこと、改めて深く感謝申し上げます。

本日はせっかくの機会ですので、何か興味深いお話ができないかと髙井先生のプロフィールを拝見いたしましたところ、Ｗｉｋｉｐｅｄｉａに掲載がありました。また、先ほど先生から頂戴したご自身の80年の歩みを綴った冊子も拝読させていただきました。

その経歴によりますと、髙井先生は高校卒業後、郵便局に勤務されながら愛知大学で学ばれ、卒業されています。そして、いただいた冊子には、大学４年生の時には郵政大学校にも在籍され、二重に学びの場を持っておられたと書かれてありました。その後、郵政省に入省され、郵便局勤務を経て、１９７４年には司法試験に合格され法曹界へ進まれました。仕事と学業を両立されてきたそのご努力には、深い感銘を受けるばかりです。

今回の受賞理由につきましては、先ほど広瀬会長の推薦のご挨拶にもございました通り、髙井先生は、愛知大学の本間喜一元学長の薫陶を受け、東亜同文書院大学予科および愛知大学予科の寮歌の伝統継承に熱心に取り組まれました。その活動を通じて、東亜同文書院および愛知大学の歴史と存在を広く世に知らしめられ、現在は日本寮歌振興会会長として、寮歌の普及・振興に大きくご貢献なさっています。このようなご活躍が次の世代にしっかりと受け継がれていくことを願ってやみません。

次に、もうお一方の受賞者、成瀬さよ子様について申し上げます。

成瀬様は、愛知大学の図書館司書として長年勤務される中で、東亜同文書院に深い関心を持たれるようになったと伺っております。

ご退職後もそのご関心を絶やすことなく、特に東亜同文書院図書館の歴史に着目し、多くの貴重な資料を収集・整理されたうえで、『上海東亜同文書院大学図書館の世界―その激動の軌跡から解き明かす―』という貴重な著作を刊行されました。

そのご研究への情熱に、深い敬意と感銘を抱いております。同時に、成瀬様の研究が、今後、東亜同文書院に関心を寄せる後進の研究者たちにとって、大きな道標となることを確信しております。

なお、成瀬様について調べている中で偶然目にしたのが、２０１０年3月にシカゴ大学のレーゲンスタイン図書館で行われた、「東亜同文書院、東亜同文会雑誌記事データベースの発表」についてのＰＤＦ資料でございました。この時は、本日ご出席の藤田先生がご講演された後に、成瀬様がプレゼンテーションを行われたとのことでした。

実は私も、１９７９年から2年ほどシカゴ大学に留学しており、そのレーゲンスタイン図書館には、ほぼ毎日のように通っておりました。40年以上も前のことですが、成瀬様のご活動を通じて、思わぬご縁を感じた次第でございます。

最後になりますが、本日受賞された髙井様、成瀬様をはじめ、ご出席の皆様方のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げまして、僭越ながらお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

〔功労賞推薦の辞〕

中島　寛司　氏



現在、日本寮歌振興会会長の任にあります髙井和伸氏の功労賞受賞にあたり、私からその推薦の理由を述べさせて頂きます。

現在の髙井氏の前任は、園部逸夫(元最高裁判事)その前が藤林益三(元第七代最高裁長官)、その前が永野重雄(元商工会会頭)、その前が大槻文平(元日経連会長)でした。

各位ともに、寮歌への想い・普及・振興に貢献しております。

寮歌は明治・大正時代に生まれています。当時の旧制高校、大学予科は、殆ど全寮制でした。

旧制高校には、明治時代に設立されたナンバースクールと大正・昭和時代に設立されたネーミングスクールがあり、前者は一高から八高まで。後者には、新潟高・松本高・山口高・松山高～廣島高など17校でした。

その他、官立大学予科6校がありました、北海道帝国大学予科、京城、臺北、旅順工科、東京商科、神戸商業などに予科がありました。

これらの寮生が作詞、作曲したのが「寮歌」でした。一部外部者作曲もありますが。

ナンバー校の一高「嗚呼玉杯に花うけて」は明治35年。ナンバー校の寮歌の初作は、明治時代が多く、ネーミングスクールの寮歌の初作は大正期からが多くなっています。

三高の寮歌「紅もゆる」は、明治37年。八高の「伊吹おろし」は大正5年。東亜同文書院の「長江の水」は、大正6年です。因みに、東亜同文書院には、院歌と寮歌で14曲、運動部の応援歌が10曲、大旅行壮行歌に、「嵐吹け吹け」があり、これは何とも意味ありげな歌詞になっています。

そもそも、寮歌は　旧制高校生の意識や思想、心意気が反映投影されています。またその寮に継承された自治・自律の伝統の謳歌、人生観・国家観・世界観、また寮生胸中に溢れる青春の憧れや悩み、友情、心理探求など様々な学生生活の哀歌が歌われています。

ところで、このような寮歌祭に愛知大学が加入参加した経過は、戦後、49番目の旧制大学としてスタートした愛知大学だから寮歌祭に参加する資格ありと、本間喜一名誉学長の提言がありました。その最初の寮歌祭参加には、長女の殿岡さんが本間先生の遺影を掲げ参加されたのが大変印象的でした。

そもそも、寮歌の生まれた淵源はなんで在ったか。当時の寮生は何を考え、将来にどう希望を託したかなど、そこに寮歌の重みがあります。



旧制高校、予科への進学は、ごく少数の選ばれた学生でした。彼らの意識には、「ノブリス・オブリージュ」に伴う責務をもっていたものと思います。

なお、昨年の、11月24日(日)には、第64回日本寮歌祭がありました。総勢60校が参加、盛大にして、意義多き開催になりました。他校の寮歌を聴き、共に高唱すれば人生の伸びしろも自然と伸びるかと思います。

今年の寮歌祭は、11月23日(日)、第65回日本寮歌祭が開催されます。

また、髙井氏は早くから弁護士になり、参議院議員も経験され、愛大卒業生の自慢の「顔」でもあります。

以上、髙井氏の功労賞受賞の推薦の辞とさせて頂きます。

ご清聴ありがとうございました。

〔受賞挨拶〕

髙井　和伸　氏

髙井和伸でございます。私の話は短くしますが、中身としてしゃべりたいことは、今日私の封筒でお配りしたものに3つ入っております。1つのでっかいのは山本利久さんが書いた『心の歌、寮歌をたずねて』で、同窓会の寮歌祭の活動が全部分かります。私の80年、髙井和伸という私の2021年の6月26日「トンボズーム」と書いてありますが、「トンボ」というのは高山にあります飛騨高校の同窓会の略称です。「ズーム」は皆から、「髙井、お前の人生はさっぱり分からんけど、めちゃくちゃなことといっぱいやっとるけど、整理してちょっとしゃべれ」と言われたので、それに応じてしゃべった内容であります。最後に「舟山文庫」というのがありますが、私がずっと東京で会社をやっていた時に、その当事者の本体が神田神保町にあった時がありました。その時に古本屋めぐりをやって岩波文庫を集めることになりました。99.9%ぐらい集まりまして、まだ古い本が全部そろっておりませんが、ほぼ100%に近い数字で、この6月引っ越しをして、この写真の建物の中に岩波文庫が全部入っております。そういったことで岩波文庫に導かれたのも寮歌祭だろうと思います。

私が色々な面で動いているのは愛知大学の魂が動かしているというふうに思っております。その大半は愛知大学の学長であった本間喜一さんでございまして、90何歳で東京の世田谷にお住まいの頃は、私が東京支部の事務局長としてインタビューに行ったこともありました。そんなところから寮歌祭に深くコミットすることもありまして、その間に司法試験も受け、司法試験を受けた後は裁判官を4年やりました。それから、国会議員を4年やりました。そういったあちこち他所のことをやっていましたけれども。ある大学の理事長も2年やりました。そういったところで感じたことは、高井という男は何でもやる気を出してやれたことです。その中の1つに愛知大学ではロースクールができる時に委員長を誰にするかという時に、私は推薦したのですが、その時は髙井がめちゃくちゃやったわけじゃなくて、副学長のオッケーを取って、こういう先生がいるけど、お願いに行っていいですかと言ったら、いいよと言われて行ってきました。そういったわけで髙井はどちらかと言うと、ずさんな男だということでめちゃくちゃやっているほうが多いかもしれませんが、ちゃんと副学長の了解を取ってから行ってきましたので、それだけ言っておきます。

裁判官も国会議員も郵政省も辞めましたので、3つ全部辞めとるわけです。そこにあります郵政省は虎ノ門にあり、私がそこに行きました。その郵政省は大手町に行っちゃい

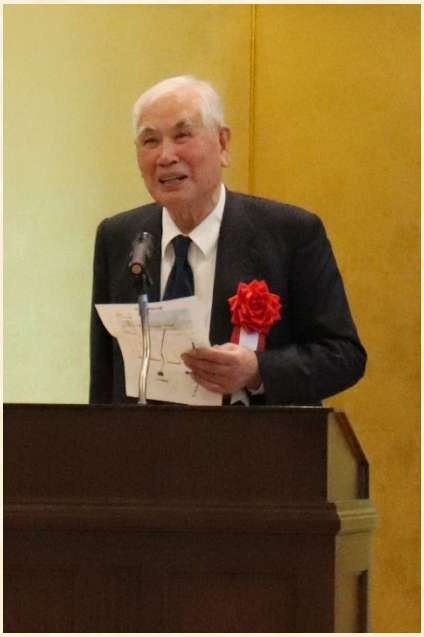
ましたけども。郵政省が一番初めにできた時に私も郵政省、本省に飛び乗って郵政省の機関誌などを作っておりました。本日のこの場所、私にとってはセンターラインなのです。昼休みになると皇居の周囲を走りに行くのです。５キロです。何を言いたいかといったら、郵政省時代も走った。それから、裁判官時代もちょっと走った。司法試験を受ける時も走った。弁護士になったら、このすぐ近くの虎ノ門１丁目１番におりましたので、ここら辺が私のずっとその後の人生のセンターラインでございまして、その場所で今日はこのような賞をいただけることを大変縁深く嬉しく、皆さんにご披露しておきたいと思っております。このように司法、行政、立法を全部やってきましたので、何でもやれると思っております。けれども、忙しすぎて何もできないというのも現実であります。

そういうことで、私もあちこちに保管していた本を全部、私の田舎へ持っていきまして、「舟山文庫」というのを作りました。この中には岩波文庫は４千冊ぐらいありますが、その他の本を入れて１万冊ぐらいあると思います。私の自宅はまた同じようにおいてありまして、そこにもまた１万や２万の本があるのではないかと思います。本だらけの人生ですが、読もうと思って買った本ばっかりです。読もうとする時は本に出会うと、凄く興奮してやる気が出てくるのです。昨日は高山市久々野町から来ましたけれども、雪が降っておりまして寒くて、東京ではみなさんが寒い寒いと言っていますが、飛騨のほうがもっと寒いものですから、悠然と東京で寒さに耐えております。何が言いたいかと言うと、本を読まなきゃいけないということで、私の人生、一生懸命５０年、６０年とかけて岩波文庫まとめましたけど、これから残っておるその他の本がどっさりありますので、分類して並べるということで、自宅を１階も２階も書棚だらけにしました。

この「舟山文庫」も一般的な本を並べております。弁護士の先輩からもたくさんいただきました。また同僚的な弁護士が俺の本も置いてくれだとか、俺の持っている文藝春秋が芥川賞を取れた作品分を全部持っているから、そこ置かしてくれとか、色んな面から置かしてくれという連中が増えてきております。ちなみに私の娘婿は文藝春秋社の芥川賞ではなくて直木賞を、先だっていただいた。うちの娘の婿さんです。直木賞という、愛の何とかというのを書いたのです。その孫が階下におりまして、そのお守りに忙しかったのですが、その孫２人も小学校３年生と１年生になりましたので、だんだん離れられるようになりまして、孫との付き合いはできるだけ飛騨の山の中でやろうということで、飛騨へ行って本を読もうという毎日を過ごそうと思っています。

国会議員時代に、行政手続法というのが私の時は成立しなかったのですが、私の議員の間に一生懸命、総務省の行政管理局の局長さんたちが陰で応援してくれまして、私は自発的に日本弁護士連合会の中で行政手続法の立案に伴って色んな案に対して日弁連としての対応で意見を述べるという会で勉強しておりました。そこで、参議院議員になった時は決算委員会というのを使いまして、不利益処分などという言葉で、あなたの代理人、党ですね、あなたの所管はいくつあるのですか、どんな法律ですか、それはどのように運用されていますか、というようなことを各省庁全部に投げて、若い課長補佐が皆それを持ち帰って、課長から局長、局長から大臣へと投げたりしました。寮歌祭ではないのですが、旧制高校関係の人間たちがキャリアで各省庁にいるわけです。私も郵政省でキャリアの下で働いていたわけですが、裁判官時代もある意味はキャリアです。キャリアのあったところで働いたこともあったり、私は司法試験受ける時もそういったことがあったのですが、キャリアの生態も分かり、参議院議員、国会議員の生態も分かり、行政官も分かりということで、私の頭にいっぱい色んなやりたいことがあったのですが、チェックしましたら６０のテーマを絞り込んでおりました。６０のテーマのうち５つぐらいは本に書いておりますが、あと５５ぐらい残っているということで、これから一生懸命、飛騨にこもってやりたいと思っています。その中の１つに岩波文庫の関係で言えば、旧制高校の皆さんは岩

波文庫を読んでいるのです。俺はセットで出た岩波文庫の何とかのシリーズを持っているからお前のとこに寄付する。そんな話も来たりしておりまして、私は岩波文庫を大事にしながら、旧制高校の連中の勉強した精神と制度的な存在が持っていた実力。そういったものも自分でマスターしながら、愛知大学の僕の歴史は凄く深い高い長いものが感じられます。特に東亜同文書院大学という名前を1つ出すと、すべて世の中のことが早く右から左へ走って、時代の流れがさっと分かって、愛知大学の存在もさっと分かってもらえました。



私の愛知大学に教授だった園部敏という先生がおられまして、台北帝国大学の行政法の先生をやっていました。その先生が愛知大学に来られて育った先生が大林正平先生。台北帝大で行政法を教えた方が名城大学で行政法の先生がいるのです。それも園部敏さんの弟子なのです。郵政省の訓練期間で習い、大林正平さんに愛知大学で習い、その園部敏さんの息子、園部逸夫というのですが、この人は最高裁で10年も最高裁判事やった人で、私の前の寮歌祭の会長なのです。その会長は、第一高等学校の前は台北高校。台北高校で終戦になって金沢に来て、そこから京大行って、京大から色々あって、最後は裁判官になって最高裁判官を10年やっておられました。その人をつかまえて、日本寮歌祭の会長になってもらうように他の連中を出し抜いて愛知大学の敏さんというお父さんの話をネタにして迫りました。

園部逸夫さんなんか寮歌祭の会長やらないよと皆言っているところ、私は1人乗り込んでいって口説いて日本寮歌振興会の会長になっていただいたという縁があって、俺も90になったからお前がやれというようなことを言われて、当時としては、僕は旧制を出ているわけでもない。愛大の夜間。しかも、僕はずっとあまり勉強してなかったのですが、そういった髙井が一生懸命やって、当時ある私学の大学の理事長をやっていた頃、園部先生に来ていただいたこともあったりして、髙井君のそれなりのものを認めてくれて、後任はお前がやれということで、皆さんの理事の方々の上に立ったわけでございます。その裏方には、愛知大学の深い歴史があって私があるということで、私1人でなれたものじゃないということです。しかも、寮歌祭については旧制あるいは新制の古い連中が寮歌祭に対して熱心に格闘しておられまして、その歴史が今日配ったこの本の『寮歌をたずねて』に詳しく書いてあります。そういう先輩たちが盛り上げてくれました。私は弁護士なものですから、しかも、すぐ側のこの会場近くでずっと弁護士やっていたものですから、色んな寮歌祭の会合に出やすいし、弁護士ですから、時間が自由になっていて、いわゆる会社などで偉くなっている人にはなかなか動けない人もいたものですから、私がそういった寮歌祭のほうへ首を突っ込んでいったのです。生き残りの証人みたいなものです。私が、寮歌祭を分かっているので、私も最後のところはこれから頑張っていきたいと思うのです。

旧制の連中が、金持ちのお坊ちゃんたちがよく勉強し、頭の良いお坊ちゃんたちが集まった旧制高校の雰囲気というのは、また格別なものがあります。そういったものは郵政省では3年間、郵政、大学を含めて寮生活をやっていたという生活もありましたものですから、そういった面で旧制高校の持っている良いところをとっつかまえて、今の日本のアメリカの下でよたよたしながら何とかなしに格好いいことだけいただいて、元気のない日本になっているのを元気のいい日本にしたいし、愛知大学の力を持って、特に東アジアに根をはっている愛知大学の実力を何とかして実現する方向でいけば愛大のこれから生きる道がもっとあるのではないかと思

います。

昔、亜細亜大学の学長が記念の行事で、東亜同文書院大学100年の時に愛知大学は皆、喧嘩に強いぞという生徒を育てたらどうかというようなことを言っておられましたけど。本間喜一も愛大事件の時に国会へ行って国会議員にやんやんといじめられたのだけど、悠々と言い切って自分の立場をすらすらしゃべり相手をやっつけて愛大を守り、それで愛知大学の命を留めてくれた。国会議事録を読んで愛大の力というのは凄いなと。本間喜一の喧嘩も強い愛大にしなきゃいかんと。

北も南も含めて朝鮮。それから台湾もあります。昔の満州もあります。それにもう1つロシアも入れまして、そういったとこに愛大が強くなって羽ばたけるように、「アジアに羽ばたく記念寮歌祭」っていうのをやりました。私がやったわけじゃない。皆でやりましたけど。あの精神を今後の愛大の中心の精神にしたいし、私もこれからの勉強にいっぱい本がありますから。よく読んでこれから精進していきたいと思っています。以上であります。ありがとうございました。

（なお、髙井様は、令和7年7月30日御逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。）

〔功労賞推薦の辞〕

藤田　佳久　氏（愛知大学名誉教授）

皆さん、おはようございます。髙井先生の刺激的なお話をされて、この年ながらまた勇気を生み出さなくちゃいけないなと思ったりした次第です。私の役割は功労賞、成瀬さよ子さんに関するお話でありまして、結論から言いますと、このたび出版された『上海東亜同文書院大学図書館の世界』ということで、こういうキーワードの本というのは初めてです。こういうものを努力されてまとめられたというところが今回の功労賞に値するという推薦文であります。その辺のところはそれぞれの方々のご推薦の言葉とかぶることがありますが、せっかく書いてきましたので読ませていただきます。

「成瀬さよ子氏の功労賞への推薦文」。成瀬さよ子氏は愛知大学図書館で長年に渡り司書として勤務されました。東亜同文書院、中国、東アジア大旅行の報告書の整理の他、霞山文庫。これは愛大が誕生した直後のことですね。霞山文庫の本が沢山本学へ移動してきましたのでその辺のところの整理、分類をされたりしたことがその出発点であります。私の場合はちょうど運良く、そういうのが整理された直後に愛大に赴任しまして、混乱した資料を、最初から整理するということではなくて、きちんと図書館の中で整理されたのを拝見することができた。そういう点では研究時間が短縮でき、大変幸運だったです。

そういう状況の中で、成瀬さんが東亜同文書院に非常に関心を持たれたということであります。そういうご関心が非常に強くありまして、先ほども阿部理事長様からお話がありましたように、２００４年に海外研修で図書館からアメリカに派遣されました。愛大の職員の方はこういうチャンスがあるのですけど、なかなか生かせてないのです。学長先生、是非、他の方々も海外へ送り出してほしいと思います。

その過程の中で、日本研究の中心にあるアメリカの、先ほどはシカゴ大学の話が出ましたけど、ミシガン大学ですね。ここは戦時中に日本と戦争をやるということで、日本のデータを集めて分析するセンターになり、それが戦後、地域研究としての日本研究センターのメッカになった大学であります。そのさい、他大学の図書館でも色々経験されて、ミシガン大学にご就任されて同大学図書館のキュレーターとなっていた仁木賢司さん。アメリカの図書館のキュレーターの方は、日本で言うと大学の教授以上のステイタスを持っておられる方ですけど。その仁木賢司さんに成瀬さんは出会ったわけです。本日は仁木様もここにお見えなのです。ちょっとお手を挙げていただいて…頭がだいぶ白くなっている方です。今日は神戸から駆けつけていただきました。この方にお会いしてアメリカにおける東亜同文書院関係資料の収集状況を知り、図書館司書として広い視点からの教示を得たわけであります。その志は退職後まで続きました。



東亜同文書院は、辛亥革命直前に清国軍対革命軍の戦争の激化する中で、大砲の弾が飛んできて最初の校舎は焼けたのですね。図書も全部焼けてしまった。そこで新たに上海北部のフランス人の倉庫を利用して新しい校舎をまた再興しました。しかし、校舎は狭くなかなかスムーズにはいかなかったところがありました。その後、その状態じゃまずいというわけで新しく新校舎とともに図書館も新築していくのですが、それを当時の根津院長が寄付金を集めながらご苦労されたわけです。そしてようやく形が整って、しかも大調査旅行で得られた多くの商品見本も10万点集まったのです。これが今残っていたら世界最大級の博物館になったのではないかと思うと非常に残念でならないのですけれども、第二次上海事件の時には、租界の外側に書院があったために、逃げる民国精鋭軍がその途上にあった校舎に放火をしまして3日から4日かけて焼失し、全部が焼けてしまったわけです。簡単に言いますと。改めて隣にあったのが上海交通大学ですね。昔は南洋公学と言って、北の北洋公学とともに、この南洋公学は中国における2つの大学として育っていくわけです。この内の南洋公学の人たちは、漢口とかフランス租界へ避難し、その跡地は避難民の巣窟になっておりました。それを当時の日本側が許可を取りながら上海交通大学を借用し、そこへ入って東亜同文書院を再興したわけであります。

その辺りの問題も含めて成瀬さんは東亜同文書院が始まって以来、焼失してしまった歴史をもう1回掘り起こしながら、データを集められたのです。その時のプロセスは私も度々、交通大学へ行きましたけれども、交通大学の方々は、当時の状況を我々に直に伝えてくれるっていうのはなかなか難しかったのです。何度か行って交友関係が出来上がった時にようやく当時残っていた図書台帳。こんな大きい台帳ですね。何冊かあるうちの1冊を持ってきていただいてそれを見せていただいたことがありました。その時にこれまでは8万冊ぐらいの蔵書だったのですが、このたくさんの図書は焼けてしまったということで、その再興のために、日本の中の研究機関とか上海における各種機関とか、さらに中国側の研究機関からも寄付をもらって、焼ける前より蔵書数が増えたほどでした。そういうようなプロセスもあったわけです。そういうのを頭に入れながら成瀬さんは明治の終わりから東亜同文書院大学の図書館の趨勢が一体どんな実態だったかっていうことを国立国会図書館、今日は前館長の大滝先生がお見えなのですけどね。アジア研究センターの資料や外務省の外交史料館の資料等などを収集して、それらを合わせながら東亜同文書院の図書館の歴史を解明されたわけです。お金がどのくらいかかったのか。誰が働いたのか。給料はどうだったのか、人事とか教育方針とか、来訪者はどんな人だったか、どんな出版をしたのかというような問題も含めて包括的にも研究されております。図書館から見た東亜同文書院。そういう視点も描かれております。後半はデータばかりですけど。前半のほうはその辺のところもまとめておられますので、大変興味深いものであります。

これまでこういう努力をされた方がいなかったのです。そこへ成瀬さんが食いついた。まさに愛大精神です。そういうことがありまして4年半ぐらいで完成させたのです。今後もどんどん研究が進んでいくのではないかなと思っております。そういうようなことも踏まえまして、この作品というのは非常に貴重な作品であって、東亜同文書院を今後研究するという方々の1つの大きなきっかけを作っていくということになるかもしれません。そういうようなことにも期待しながら、私のほうから推薦をさせていただきました。簡単ですが以上です。どうもありがとうございました。

〔受賞挨拶〕

成瀬　さよ子　氏

ただ今、藤田先生から紹介していただきましたので、私としてはそれほど述べることもないような状態です。本日は功労賞をいただきまして本当にありがとうございました。昨年出版しました『上海東亜同文書院大学図書館の世界―その激動の軌跡から解き明かす―』という本ですが、それによって今回の功労賞をいただけたということで、本当に驚いていますし、大変ありがたいと思っています。

簡単に本の説明をいたしますと、先ほど藤田先生が紹介して下さいましたが、上海東亜同文書院は二度の災禍にあいました。建物も図書も学生達が集めた各地の産業資料も全部焼失してしまいました。１回目は、大正２年の７月の第二革命の時（北軍と革命軍の衝突）に桂墅里（クイシュリ）校舎が焼け落ちました。桂墅里校舎というのは、明治34年から大正２年までの間使用していた校舎ですけれども。この間の大きな特徴としては、財政難が一番の課題でした。東亜同文書院の母体である東亜同文会が、毎年毎年、赤字が続いていたのです。この間ずっと東亜同文会は赤字でした。１つの理由は外務省の国庫補助金というのが年間４万円しか交付されなかったのです。それも東亜同文会に交付されていて、東亜同文書院にはその中で適当に配分しなさいというような状態でしたので、４万円のうち最初は書院には８千円ぐらいしか補助金が配分されなくて、これじゃやっていけないということで配分先を絞って書院には２万７千円ぐらいまで増加していきました。



桂墅里校舎の時代には、図書館というのはまだ存在していません。文庫というのがあって、学生会館みたいな、学生クラブの中の一室を借りて文庫室がありました。このクラブには他に新聞閲覧室、図書閲覧室、閑話室。それから学生の応接室があり、また商人控室というようなものがありまして、ここは生協みたいな存在で、お菓子とか果物とかその他、弊害がないようなものが置いてあったと書いてあります。お酒は販売しないということは厳格に決まっていました。

図書の数は、公式データはこの時代には記されていませんが。後日談として約２万５千冊が備わっていた。その内のほとんどを占める漢籍が２万冊、和書が５千冊。洋書はほんの僅かだったというようなことが後日述べられています。

中期に入りますと、皆さんよくご覧になるこの素敵な建物は、虹橋路（ホンジャオロ）校舎ですね。こちらは大正６年に設立されまして、昭和12年まで使用しました。１９１７年から１９３７年までの20年間をこの虹橋路校舎で学生さんたちは過ごしました。この20年間が本当に書院の黄金の時代とも言われました。非常に活発な動きを学生さんも先生方もされました。国庫補助金がこの時からどういうふうになったかと言いますと、東亜同文会に一括で交付されるのではなく、申請した東亜同文書院とか東京同文書院とかそういった個々の事業に対して補助金を交付するように変更されましたので、年度によって変わるのですが。東亜同文書院には大体20万円ぐらい補助金額が交付されるようになったのですね。それから大正10年に初めて独立した図書館というものが完成します。その時に専任の図書館主任（図書館長）として植野武雄という人が着任します。この人がまた凄い力のある方だったので、植野武雄がいた時には図書費は１万円を超えたのですね。虹橋路校舎は20年間続いたというふうに言いましたけども。その中で１万円を超えたのは２年間だけなのです。あとは本当に平均６千円代だったのですね。どんなに先生方が訴えても認められなかったのです。

その頃、蔵書統計とか、利用者統計とかそ

ういうものを公表するようになりました。蔵書目録も出版しましたし、カード検索も自由にできるようになっています。学生は『読書月間』というのを発行して自分たちで作って教員や学生さん以外に来客の方へなんかにも配っていたのですね。それから図書館ガイダンスのための資料、『利用の手引き』というのも学生さんが作って、これも配布していました。上海図書館協会というのがあって、14の大学図書館や公共図書館等が参加している組織なのですけども、これに植野主任は図書館として加盟して、学生は自由に他大学の図書館、公共図書館、中国の図書館を利用できるようにしたということです。それが今日の相互協力の基礎になっていると思います。

一方で書院図書館の蔵書は、本の配架方法についてきちんとしたルールがなかったために、風評としていつも言われていたのが書院の図書館は本がめちゃくちゃになっている。請求してもなかなか本が出てこないというように大変不評を買っていました。何とかしなければと言った焦りはあってもなかなか修正できなくて、そのまま虹橋路校舎の図書館は、配架に対するこんな不満だらけで終わったようです。

この時期、書院への見学者がめちゃくちゃ多くて、日本の本土から来られる人、特に中国大陸を見学するついでに立ち寄られる人が非常に多くて、どうなっちゃったのかなと思うぐらい多かったです。調査（見学者ではない訪問者は除いた）では、大正13年から昭和11年の12年間弱で大体7，180名の個人、及び団体の見学者が図書館を訪問しています。そうすると、院長とか役職のある教員の方が案内をされます。多い時には一度に1，000人の見学者がおりましたので、そういった時には学生さんは休講となり、学生達も分担して見学者の対応をしたと書いてありました。ビックリです！

海外からの著名人たちの講演会も凄く多くて、多い年には14～15名の著名な外国人や、あるいは日本の東大とか京大とか帝大の先生方が、講演しております。慶應義塾塾長の林毅陸（本学の初代学長）も見学、後に講演もされていました。インドのタゴールなんかも講演していますし、魯迅とか胡適等著名な中国人たちも書院で講演しています。ですが、招聘して講演してもらったという訳ではなく、上海は国際都市ですので、そこにたまたま何かの用事でいらっしゃった人を引き込んで上手く講演に結びつけていたようです。昭和12年に日中戦争で焼失した時には10万冊の蔵書が焼失したといわれています。

後期に入りますと、昭和13年から敗戦による閉校となる昭和20年8月までの間、7年間なのですけども、上海交通大学の跡地を借用して海格路（ハイコーロ）臨時校舎時代という名前が付いています。この校舎で学生さんたちは勉強します。最初からのゼロからのスタートになってしまいましたので、院長とか東亜同文会の理事の方、ＯＢの方等、そういった人たちが日本全国や中国大陸のあちこちに寄付金や蔵書の提供、あるいは出版社なんかにでも本を提供して下さいと寄贈のお願いに巡ります。寄付金を30万円というのを目標に立てていたのですけども、1年半で到達してしまいます。本の寄付は、昭和13年と14年度の2年間で約2万冊が寄贈されて、購入本もどんどん増えましたので4年経った昭和16年には、焼失前の10万冊をはるかに超えるような蔵書になっていきます。

昭和20年の8月の敗戦時に中国政府機関に接収されてしまった東亜同文書院の蔵書は、２５５，０８４冊という記載がありました。上海交通大学を借用する時には大内院長は「もうこの借用は、ほんとに一次的なもので必ず近い将来において新しい土地を得て移転すべきだ」という信念のもとに予算を獲得するのですけれども。昭和13年、昭和14年には土地の購入代金として２００万獲得するのですけれども。結局実現できなかった。大変悔しい思いをしたということが分かりました。ご興味のある方は是非本を手に取っていただけたら有難いです。

今後は私の作成した本からさらに研究が派生していくことを願って受賞の挨拶といたします。

本日はありがとうございました。

東亜同文書院記念基金会　記念賞・功労賞・奨励賞のこれまでの受賞者

第1回 平5(1993)年度 記念賞	平成5(1993)年11月5日 **上海交通大学 中日科技研究会（翁史烈(当時の上海交通大学学長)が会長)** 科学技術及び教育に関する日本の資料を中国の学生向けに刊行するなど日本事情を中国に紹介する活動を行っている。(東亜同文書院大学45期専門部卒業生吉川信夫氏は私財を投じて同会を支援した。)
記念賞	**谷　光隆 氏（元愛知大学教授）** 大旅行調査を研究。大運河調査報告書を刊行。
記念賞	**菅野　俊作 氏(東北大学名誉教授 41期)** 中国人留学生を支援。
第2回 平6(1994)年度 記念賞	平成6(1994)年9月16日 **林　文月 氏（台湾大学名誉教授）** 源氏物語他を中国語に翻訳刊行。
記念賞	**栗田　尚弥 氏（埼玉大学講師）** 「東亜同文書院 日中を架けんとした男たち」を刊行。
記念賞	**白川　正雄 氏（42期）** 戦後スマトラに永住し戦火で消失したモスクを再建。
記念賞	**村上　和夫 氏（長野県中国文化研究会副会長）** 中国古代瓦当文様の研究を刊行。
第3回 平7(1995)年度 記念賞	平成7(1995)年9月13日 **藤田　佳久 氏（愛知大学教授）** 大旅行調査報告書を解読し「中国を歩く」等を刊行。
第4回 平8(1996)年度 記念賞	平成8(1996)年9月6日 **ダグラス・レイノルズ 氏（ジョージア州立大学歴史学部副教授）** 東亜同文書院の大旅行調査を研究し、それが戦後米国で発展した地域研究(Area studies)よりも古い歴史を持つ優れたものであることを検証し「地域研究の知られざる起源 日本の東亜同文書院」を刊行して広く世に紹介した。
記念賞	**陳　弘 氏（44期）** 日中要人の会談の通訳。人民日報東京特派員として友好促進に貢献。
第5回 平9(1997)年度 記念賞	平成9(1997)年10月7日 **遠山　正瑛 氏（鳥取大学名誉教授）** 日本砂漠緑化実践協会の設立ボランティアを指導し内蒙古砂漠に植林。
第6回 平10(1998)年度 研究奨励賞	平成10(1998)年9月24日 **薄井　由 氏（上海復旦大学修士課程）** 「東亜同文書院大旅行初歩研究」を中国で出版予定。書院の業績を中国で紹介。
研究奨励賞	**水谷　尚子 氏（日本女子大学博士課程）** 書院中華学生部を研究し、論文「東亜同文書院に学んだ中国人」で同学生部の業績を紹介。

第 7 回 平 11(1999)年度 記念賞	平成 11(1999)年 9 月 28 日 **翟　新（テキシン） 氏 （上海復旦大学大学院修士課程修了 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程）** 東亜同文会の日中近代史における足跡を研究、再評価する論文を発表。
研究奨励賞	**劉　永誌 氏（愛知大学大学院文学研究科博士後期修士課程 博士学位取得）** タクラマカン砂漠の困難な現地調査を行い、その日本語論文は辺境の地誌学的研究として高く評価された。
第 8 回 平 12(2000)年度	平成 12(2000)年 9 月 29 日 **名古屋テレビ「青春の中国」取材班** 東亜同文書院の「日中の架け橋を」という理想に生きた書院生の青春とそれを現代に受け継ぐ愛大学生の姿を生き生きとテレビで紹介。
第 9 回 平 14(2002)年度	平成 14(2002)年 9 月 26 日 **西所　正道 氏** 「上海東亜同文書院風雲録」を刊行。卒業生たちの足跡を追うことにより、東亜同文書院の建学の精神が世紀を越えて現代に生き続ける姿を広く世に紹介。
第 10 回 平 15(2003)年度 記念賞	平成 15(2003)年 9 月 24 日 **工藤　俊一 氏(元北京大学文教専家)** 「北京大学 超エリートたちの日本論―衝撃の「歴史認識」」を刊行。各方面から高い評価を得た。
第 11 回 平 16(2004)年度 記念賞	平成 16(2004)年 9 月 29 日 **今泉　潤太郎 氏（愛知大学名誉教授）** 「愛知大学『中日大辞典』」の編纂に長年献身的に力を注ぎ、同辞典の内外における高い評価の形成に多大の寄与をした。
第 12 回 平 17(2005)年度 記念賞	平成 17(2005)年 10 月 7 日 **大森　和夫 氏（国際交流研究所長）・弘子さん夫妻** 日本語教材を中国の大学に寄贈するなど日中文化交流活動を続けた。
第 13 回 平 18(2006)年度 記念賞	平成 18(2006)年 12 月 8 日 **テレビ宮崎** 強制連行で過酷な労働を強いられた中国人労働者を親身にかばった勇気ある日本の青年の精神と行動力のルーツを辿るヒューマンドキュメンタリーを制作放送した。
奨励賞	**成瀬　さよ子 氏（愛知大学豊橋図書館司書）** 内外のぼうだいな資料を収集整理し貴重な「東亜同文書院関係目録」を作成刊行した。
第 14 回 平 19(2007)年度 記念賞	平成 20(2008)年 1 月 29 日 **淺川　義基 氏** 北京国際元老テニス大会に連続 20 年間出場する中で、会の推進的役割を果たし、日中友好と国際親善のために尽力した。

第 15 回 平 20(2008)年度 記念賞	平成 21(2009)年 1 月 30 日 **工藤　美代子 氏** 著書「われ巣鴨に出頭せず」において文麿公の行動を論理的に検証したが、これは東京裁判史観を根底から覆す程の功績があった。
第 16 回 平 21(2009)年度 記念賞	平成 22(2010)年 1 月 27 日 **葉　敦平 氏（上海交通大学校史研究室教授）** 東亜同文書院の上海交通大学キャンパスの占用、両校の近隣同士の友好関係などを、史実に基づき組織的に研究し、「資料選集」を編集。
第 17 回 平 22(2010)年度 記念賞	平成 23(2011)年 1 月 26 日 **小坂　文乃 氏** 著書「革命をプロデュースした日本人」で、孫文に対し多大の援助を与えながら「一切口外シテハナラズ」として革命運動の隠れた援助者であった梅屋庄吉の生涯を明らかにした。
記念賞	**愛知大学中日大辞典編纂所** 鈴木擇郎先生らにより計画された東亜同文書院中国語教育のシンボルともいうべき辞典編纂に長年取り組み中日大辞典第三版を刊行。
第 18 回 平 23(2011)年度 功労賞	平成 24(2012)年 1 月 24 日 **藤田　佳久 氏（愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センター初代センター長）** オープン・リサーチ・センター事業実施。東京・中日・北陸中日新聞連載「東亜同文書院の群像」執筆。
奨励賞	**武井　義和 氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員）** 「孫文を支えた日本人」出版。「中国における東亜同文書院の『資料選集』」翻訳。
第 19 回 平 24(2012)年度 奨励賞	平成 25(2013)年 1 月 25 日 **保坂　治朗 氏** それまで東京同文書院の実態が幻的存在であったのを実像化した点で先駆的であり、当記念センターの書院研究で当初からなかなかアプローチ出来なかった空白部分を埋め、時代背景にも言及されつつ東亜同文書院のある種原点を解明された。
奨励賞	**有森　茂生 氏** 東亜同文書院関係の図書、資料文書、写真、レコードなどを 2008 年以来ほぼ毎年のように寄贈され、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの展示や研究に貢献された。
第 20 回 平 25(2013)年度 記念賞	平成 26(2014)年 1 月 28 日 **岡部　達味 氏（東京都立大学名誉教授、霞山会元理事）** 中国政治・中国外交を専門とした学術研究に加え、メディアを通じて我が国論壇としてリードする役割を果たされた。1997～2001 年には日中友好 21 世紀委員会日本側座長を務められ、日中間の相互理解促進に大きく寄与された。

第 20 回 平 25(2013)年度 功労賞	**平井　誠二 氏（公益財団法人大倉精神文化研究所研究部長）** 東亜同文書院卒 3 期生大倉（旧姓江原）邦彦氏が戦前設立した大倉精神文化研究所の研究員として、同研究所の研究活動を企画運営されている。東亜同文書院関係にも強い関心をもち、多くの史資料収集を行なうとともに、機関誌『大倉山論集』に多くの研究者を動員して、その成果を集積されている。
第 21 回 平 26(2014)年度 記念賞	**平成 27(2015)年 1 月 27 日** **北川　文章 氏（霞山会顧問、霞山会元理事長、山一証券元副社長）** 日中間の文化交流事業、留学生交流事業、日中間の相互理解の推進に尽力されたことにより、中国上海交通大学及び浙江大学より顧問教授に任命されるとともに、揚州大学より名誉教授の称号を授与された。霞山会理事長就任時には愛知大学理事も兼任され、史実に基づいた「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に尽力されるなど、国際研究交流事業推進に多大な貢献をなされた。
功労賞	**仁木　賢司 氏（ミシガン大学上級ライブラリアン）** 東亜同文書院関係の文献資料を精力的に取集し、ミシガン大学等の研究者へその提供および指導をされ、アメリカにおける東亜同文書院研究のベースをつくられた。2009 年には「ミシガン大学の東亜同文書院およびアジア系文献史資料のグーグル化」、2014 年には「書院との出会いと史資料」と題して愛知大学で講演され、東亜同文書院大学記念センター発展への期待を力説された。
第 22 回 平 27(2015)年度 記念賞	**平成 28(2016)年 1 月 22 日** **小崎　昌業 氏（東亜同文書院大学第 42 期、愛知大学第 1 期、在モンゴル特命全権元大使、在ルーマニア特命全権元大使）** 東亜同文書院大学の第 42 期生並びに愛知大学（旧制）の第 1 期生として、歴史的に関わりが深いこれら 2 つの大学の発展のために、一般財団法人霞山会を理事、また顧問として、同時に、学校法人愛知大学の監事も務められるなど、生涯を懸けてご尽力されてこられた。 また、外交官としてのご活躍、東亜同文会の昭和期の諸活動の取りまとめ、愛知大学に引き継がれた現地主義教育へのご指導など、実質を伴ったご功績を残してこられた。
第 23 回 平 28(2016)年度 功労賞	**平成 29(2017)年 2 月 1 日** **村上　武 氏（回光会・東光書院院長）** 東亜同文書院 18 期生で、中華学生部の教員を務められた父、村上徳太郎氏の御子息。父は、東亜同文書院の生みの親である荒尾精、近衛篤麿、根津一の三先覚（聖人）を祀った靖亜神社のご神体を帰国後もご自宅（埼玉県）に東光書院を興して祀られた。武氏は、父を継承しご神体を祀られてきた。 あわせて、荒尾精が志した中国、東アジアとの共同、および実践の精神を評価し、著書や伝記を復刻したほかそれをふまえ、評論紙「回光」を月刊にて発刊し、啓蒙活動を進め、2015 年には、『日清戦勝異論』を刊行し、荒尾精を顕彰する諸活動に尽力なされた。

第 24 回 平 29(2017)年度 記念賞	平成 30（2018）年 3 月 28 日 **山田　正 氏（霞山会元理事長、愛知大学元理事）** 一般財団法人霞山会の理事（2006～2015 年）、筆頭常任理事（2007 年）、理事長（2008～2014 年）をつとめられ、文化・教育、学術・研究交流分野の発展に尽力され数々の業績を残された。また、2008 年 4 月より愛知大学理事に就任され、当会と愛知大学の繋がりをより緊密にされた。 霞山会の広報誌『Think Asia』を創刊し、アジア諸国・地域の社会、歴史、文化に関する情報の提供に尽力され、学術・研究交流では、上海交通大学および上海市日本研究交流協会、北京の中国国際交流協会、中国教育国際交流協会等各機関との研究者の相互交換、共同研究、シンポジウムなどをおこない学術研究交流の活性化をはかられた。
第 25 回 平 30(2018)年度 功労賞	平成 31(2019)年 3 月 6 日 **中島　寛司 氏（愛知大学同窓会元神奈川支部長）** 愛知大学同窓会のリーダーとして滬友会、霞山会、愛知大学が主催する多岐にわたる行事にかかわり、東亜同文書院卒業生と愛知大学関係者とのつなぎ役を担われるなど、人望と行動力は第一人者である。
第 26 回 令元(2019)年度 記念賞	令和 3(2021)年 3 月 10 日 **星　博人 氏（東亜学院元院長）** 総合商社丸紅を退職後、霞山会常任顧問に就任。翌年から東亜学院長を兼務し 18 年間中国との文化・学術・教育交流の発展に尽力された。また「霞山会と上海交通大学の交流史、現状と今後の発展趨勢に関する学術研究」の参画者として東亜同文書院が上海交通大学を借用した事実関係を解明するなど大きな成果を上げられた。
第 27 回 令 2(2020)年度 記念賞	令和 3(2021)年 3 月 10 日 **大城　立裕 氏（予科 44 期）** 動乱の戦時下、学徒出陣を体験。沖縄帰郷後は仕事の傍ら、それまでの経験を踏まえた数々の小説を発表。「芥川賞」「平林たいこ文学賞」など多数受賞。国からは、1990 年 紫綬褒章、1966 年 勲四等旭日小綬章を受賞された。沖縄の人々からも「知の巨人」として絶大な支持を集め、沖縄琉球文化の発展などに偉大な功績を残された。
第 28 回 令 3(2021)年度 功労賞	令和 4(2022)年 3 月 14 日 **殿岡　晟子 氏（本間喜一名誉学長のご長女）** 東亜同文書院大学の学長また愛知大学の創立者でありかつ学長も務められた本間喜一先生の長女として書院卒業生と愛知大学および同卒業生との交流を積極的に進められ、本間喜一先生という大きな存在を関係者の心の中に映し続けてこられた。また、愛知大学東亜同文書院大学記念センター設置の際には多くの貴重資料を寄贈する等、センターの運営・活動に多大な貢献をなされた。
第 29 回 令 4(2022)年度 記念賞	令和 5(2023)年 3 月 7 日 **嵯峨　隆 氏（静岡県立大学名誉教授）** 長年にわたり中国政治思想史の研究で多くの成果をあげてこられた。近年において日本におけるアジア主義研究にも関心を広げ、その文脈で東亜同文会初代会長をつとめた近衛篤麿公の思想と行動の再評価に向けて研究を進め、その成果を上梓された。

第 29 回 令 4(2022)年度 功労賞	**越知　專 氏（本間喜一顕彰会名誉会長、愛知大学元客員研究員）** 東亜同文書院大学記念センターの運営発展ならびに本間喜一学長の顕彰に大きく貢献。同センターの展示施設開設とともに運営委員として参画され、愛知大学入学以来写真部員として撮りためた多くの記録写真や講義ノートを提供され、展示方式などの充実化に努めた。本間先生への尊敬の念を熱く抱き、本間イズムに強く共感し、本間学長展示室の充実化、何冊もの顕彰本の刊行、豊橋名古屋両校舎と山形県川西町への本間先生胸像の寄贈、東北地方からの愛知大学入学生への奨学金給付の実現、これらに伴う多額な寄付金の提供など、東亜同文書院大学記念センターへの支援に惜しみなく力を注いでくださった。
第 30 回 令 5(2023)年度 功労賞	**令和 6(2024)年 3 月 4 日** **蔡　玉平 氏（上海交通大学国際合作と交流処副処長、上海交通大学日本研究中心理事、副センター長）** 長年にわたり霞山会と上海交通大学との協定に基づく研究・学術交流、および留学生交流事業の大学側担当として業務に精励され、日中間の相互理解の推進ならびに研究交流の発展に貢献された。 さらに 2004 年～2006 年には霞山会と上海交通大学校史研究室が共同で行った史実に基づく「上海交通大学と財団法人霞山会の歴史関係に関する共同研究」に熱意をもって取り組み、日中双方が評価しうる成果を取りまとめるため尽力された。
奨励賞	**石田　卓生 氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員）** 1991 年に愛知大学文学部文学科中国文学専修へ入学され、満州国文学を通して作者が書院卒であったことから東亜同文書院および中国語教育に関心を持ち、さらに愛知大学大学院中国研究科へ進学して研鑽を重ね博士（中国研究）の学位を取得された。 近年それらの成果は二冊にまとめられ刊行された。その一冊目は個別論文の成果をまとめた「東亜同文書院の教育に関する多面的研究」で、もう一冊は書院の中国語教育の根幹を担った「「華語萃編」初集」で現代の視点から翻訳と総訳を行いリニューアルした出色の成果として評価された。
第 31 回 令 6(2024)年度 功労賞	**令和 7(2025)年 3 月 5 日** **髙井　和伸 氏（愛知大学同窓会東京支部長）** 愛知大学本間喜一学長からの示唆を受け東亜同文書院大学予科および愛知大学予科の寮歌の伝統をふまえ寮歌振興会へ加入し、両校予科の歴史と存在を広く知らしめるとともに、そのすぐれた指導性が高く評価され、現在は日本寮歌振興会の会長に就任され、日本の寮歌の普及と振興に力強く大きく貢献された。
功労賞	**成瀬　さよ子 氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター研究員）** 愛知大学図書館司書として永年にわたり務める中で、東亜同文書院に多大な関心を持たれ、とくに退職後は戦前の日中戦争下の上海で焼失され再建された東亜同文書院図書館の急増した図書の蔵書や経費の変容をさまざまな諸資料から求め収集され、このほど『上海東亜同文書院大学図書館の世界―その激動の軌跡から解き明かす―』を刊行され、関係者から多大な注目を集めている。



授賞式参加者　敬称略

表紙写真参加者（写真順）

高橋幸紀
梅村博文
大滝則忠
小川晃史
淀野敏男
井上俊一
藤村延魚
伊藤登美夫
八木好郎
齊本正嘉
中島寛司
中山　弘
阿部　光
嵯峨　隆
平井誠二
栗田尚弥
大野豊久
森　健一
西川直恵
長本沙世子
岡村幹吉
六鹿茂夫
藤田佳久
髙井和伸
阿部純一
広瀬裕樹
成瀬さよ子
加納　寛
鈴木正也
仁木賢司

他（五十音順）

倉持由美子
齋藤眞苗
柴田　孝

東亜同文書院記念基金特別奨励賞
東亜同文書院記念基金栄誉賞　授与

東亜同文書院記念基金会では、書院への理解を深め、伝統を引き継いでいくことを期待して本学学生へ２種類の表彰をしております。１９９９年度より「**東亜同文書院記念基金栄誉賞**」を設け、学位記授与式において、人物・学業成績が優れた者を表彰しています。

また、２０１３年度より「**東亜同文書院記念基金特別奨励賞**」を設け、入学式において入学試験の成績が最も優秀な入学者に対して、同賞を贈っております。

東亜同文書院記念基金　特別奨励賞

【２０２４年度受賞者】

法学部　片桐（かたぎり）　寛翔（ひろと）

文学部　西浦（にしうら）　菜々美（ななみ）

東亜同文書院記念基金　栄誉賞

【２０２４年度受賞者】

国際コミュニケーション学部　森（もり）　あす花（か）

地域政策学部　野澤（のざわ）　奈都（なつ）



【基金会役員名簿】（２０２５年２月時点）

会長
広瀬　裕樹（愛知大学理事長・学長）

副会長
阿部　純一（霞山会理事長）

理事
藤田　佳久（愛知大学名誉教授）
六鹿　茂夫（霞山会常任理事）
加納　寛（愛知大学 東亜同文書院大学記念センター長）
鈴木　正也（愛知大学事務局長）

監事
岡村　幹吉（岡村会計事務所）



本間先生鈔墓の会

令和6年5月12日(日) 東京小平霊園

令和 6 年 5 月 12 日(日)、本間先生が静かに眠っている小平霊園の墓前にて、同窓会関東 4 支部の運営のもとに開催致しました。会には、長女の殿岡晟子さん、孫の本間正久さんはじめ広瀬学長、加納副学長、藤田名誉教授、八木同窓会長など 22 名の方が参加されました。また、越知さんら多数の欠席の方から近況を記した連絡が寄せられ、本間先生を慕う気持ちが表れていました。直会の席にて、殿岡さんは、本間先生の貴重な遺品資料などをお持ちになり、そのエピソードを昨日の出来事のようにお話いただきました。齊本同窓会副会長は、本間先生の人間愛を語り、広瀬学長は、本間イズムを継承することの意義を語られました。橙やでの直会は、心尽くしの料理に、美味しいお酒に、歓談絶えることなく和やかな時間の流れに、充実した一日になりました。

(昭和 33 年卒 中島寛司 記)

【参加者】(順不同・敬称略)　殿岡 晟子、本間 正久、八木 好郎、小川 千尋、岩間 毅、中島 寛司、伊藤 登美夫、鳥越 剛、堀 昌彦、中山 弘、村尾 竹一、齊本 正嘉、中川 善弘、夏目 益良、吉田 一弘、加藤 武史、大野 豊久、広瀬 裕樹、加納 寛、藤田 佳久、久次米 剛生、中野 貴文　計 22 名



荒尾東方斎先生追悼式

令和6年11月16日(土)
京都熊野若王子神社

東方斎荒尾精先生を顕彰する京都追悼式は今年も開催されました。今年もご神慮により好天に恵まれ、今年　愛知大学の新学長に就任される広瀬裕樹先生をはじめ32名の皆さま方に参加いただき盛大に行えました。事前に隣地の生い茂った雑草を、同窓会京都支部長　射場正治様が草刈機を持込み綺麗にしていただけ、式当日は綺麗に「東方斎碑」「九烈士碑」を前に祭祀執行となりました。「愛知大学史」を学生に講義されている石田卓生先生は講義で学生に京都追悼式の話を教えたいと仰っておられ頼もしい限りです。東亜同文書院同窓会（滬友会）から愛知大学同窓会に託された荒尾精先生を顕彰する京都追悼式は来年以降も引き続き開催されます。

(昭和52年卒 有森茂生 記)

【参加者】(順不同・敬称略)
角 眞由美、高橋 剛、中島 寛司、久里 和英、中澤 勇、脇水 達生、松山 哲彦、小西 一英、廣部 藤一郎、川原 元則、鈴木 孝博、中村 泉、青木 加代美、山崎 陽介、磯部 晴夫、畠山 一郎、鳥越 剛、佐藤 武史、大野 豊久、西川 米子、藤田 佳久、竹本 陽三、滝下 隆夫、堀田 庄三、加藤　正人、有森 茂生、広瀬 裕樹、加納 寛、中野 貴文、石田 卓生、樋口 裕嗣、伊藤　公一　宮司　計 32 名



山洲根津先生墓参 梅花忌

令和7年2月18日(火)
京都伏見 月橋院

「荒天そして積雪があるかも」という天気予報が外れ、好天に恵まれた17名の皆さまが月橋院に参じました。本堂で法要後、墓前で香華を手向けさせていただき「院歌」「学生歌」を泉下の山洲先生に捧げました。そして藤田佳久先生の記念講演『京都若王子時代の根津一』を参加者一同が書院で拝聴しました。明年は百回忌という話とともに東亜同文書院125周年にあたるという話が弾んだものでした。直会は伏見の月桂冠で和気藹々とした雰囲気で行われ、その直会のなかでは今後の梅花忌を参加しやすい土曜日開催との御要望があり、参加者多数の方々の御賛同をいただけました。これで明年の梅花忌から土曜日開催となり、平日働かれている方々も参加しやすい梅花忌となりそうです。

（昭和52年卒 有森茂生 記）

【参加者】（順不同・敬称略）
堀田 庄三、磯部 晴夫、中島 寛司、鳥越 剛、西川 米子、中村 泉、大野 豊久、中澤 勇、滝下 隆夫、木川 敬三、山崎 陽介、山本 義幸、有森 茂生、加納 寛、藤田 佳久、石田 卓生、中野 貴文　計17名



山洲根津先生墓参 桜花忌

令和7年3月23日(日)
横浜鶴見 總持寺

根津一先覚の命日は、2月18日で、関西では、梅花忌として2月に墓参をしています。関東では、桜花忌として3･4月に開催しています。今年は3月23日に、横浜の総持寺の墓前に、10名が集いました。

最初、総持寺僧侶による読経のあと各位の焼香参拝。各位参拝のあと藤田名誉教授の根津一先覚の人柄・功績などのお話がありました。 根津先覚について、その教育指針についての詳しい内容は割愛しますが、近衛篤麿公亡き後〈1904年死去〉根津先覚は、東亜同文会、東亜同文書院の中心的存在となり、書院生からも尊敬され慕われていました。 あと東亜同文書院の院歌を斉唱し、直会会場へ移動しました。 直会会場は、蓬莱春飯店、大きな円卓に10名が、生ビールで献杯、順次運ばれる料理に、歓談尽きることなく～ 色々な会話・話題の中から、各位何を学び、何を考えてか、生きている人生いつも成長したいものです。墓参の意味もこんな学び合う機会を提供しているのではと思います。

（昭和33年卒 中島寛司 記）

【参加者】（順不同・敬称略）
齊本 正嘉、伊藤 登美夫、鳥越 剛、中島 寛司、吉田 一弘、中山 弘、大野 豊久、加納 寛、藤田 佳久、中野 貴文　計10名

東亜同文書院大学記念センター活動レポート

❶熊本展示会・講演会を開催

東亜同文書院大学記念センターが主催する熊本展示会・講演会『「東亜同文書院」と「熊本」』を、2024年11月2日（土）と11月3日（日）の2日間、くまもと県民交流館パレアにて開催しました。

11月3日（日）には講演会を開催し、野田真衣様より「孫文の革命運動支援における宮崎兄弟と東亜同文書院」について、野口宗親様より「済々黌における中国語教育と東亜同文書院」について、藤田佳久名誉教授より「世界最大級の踏査旅行を中国で展開した書院生たちの軌跡と近代中国像」について講演が行われました。同窓会九州支部・岡山支部の皆様や、東亜同文書院と深く関わりのある熊本県の済々黌高等学校同窓会の皆様のご協力のおかげもあり、展示会・講演会ともに大盛況で終えることが出来ました。

台風21号の影響が心配されましたが、講演会の日には朝から晴天となり、2日間を通して100名を超える多くの方にご来場いただきました。

【展示会感想】

・貴校の素晴らしさをあらためて感じる内容でとても良かったです。本黌もその当時に諸先輩方が活躍されているので、大変親近感が沸きました。これからも貴校との交流が続くとありがたく存じます。

・愛知大学の設立までを詳しく知られて良い展示でした。戦前の日本と中国の繋がり、高校までの近代史ではあまり習わないことがとても興味深かったです。

【講演会感想】

・宮崎兄弟と多数の資料をもとに、よく研究されていると感明しました。

・熊本の地になぜ東亜同文書院との関わりがあったかをよく理解できた。

・長年研究に携ってこられた先生のお話だけに、とても引き込まれる思いでお話を聴かせていただきました。









❷名誉博士　平松礼二画伯特別展覧会を開催

第６回「愛知大学名誉博士 平松礼二展　～海をこえ巡る美」を２０２４年11月９日（土）～11月16日（土）の８日間、大学記念館２階　名誉博士記念室にて開催しました。多くの方々の観覧があり、８日間で８９７名の来館者となりました。

第６回となる今回の展覧会は、平松礼二画伯の画業の初期から注目し、現在に至るまで収蔵を続ける箱根・芦ノ湖成川美術館コレクションの大作を交えて、世界で注目を集める平松礼二作品の魅力をご紹介いたしました。

平松画伯から愛知大学に寄託された３００点以上の平松コレクションからは、長年過ごした東海地方のゆかりの作品、日本各地の風景画、世界へ活躍の舞台を広げたジャポニスムシリーズの他、『文藝春秋』表紙絵（複製）についてご紹介がありました。

初日となる11月９日（土）は、平松先生の講演会「ジャポニスムのふるさとへ―海からと空からと。」が開催され、飛鳥Ⅲのための制作や、ジヴェルニー印象派美術館に収蔵された屏風の連作のお話をしていただきました。

ご来館者の皆様からは、素晴らしかったとのお声をいただき、お楽しみいただけた８日間となりました。













国際シンポジウム

2016年 「東亜同文書院卒業生たちの軌跡を追う」
2015年 「近代日中関係史の中のアジア主義-東亜同文書院と東亜同文会-」
2014年 「東亜同文書院の中国研究-その現代的意味」
2013年 「近代日中関係史の中の東亜同文書院」
「孫文と東アジアの平和」
2012年 「近代台湾の経済社会変遷-日本とのかかわりをめぐって-」
2011年 「辛亥革命・孫文・東亜同文会」
2010年 「戦前外地にあった愛大ルーツ5校の出身学生が語るアジアと愛大」
2009年 「欧米研究者から見た東亜同文書院」
2008年 「東亜同文会の東アジアにおける教育活動とその展開」
2007年 「日中研究者による東亜同文書院研究」
「世界と日本の大学史の流れの中での東亜同文書院と愛知大学」

展示会・講演会

2024年	熊　本	2012年	沖　縄
2023年	岡　山	2011年	富　山
2022年	金　沢	2010年	名古屋
2019年	高　松	2010年	米　沢
2018年	岡　崎	2010年	京　都
2017年	浜　松	2009年	神　戸
2016年	名古屋	2009年	シカゴ
2015年	松　本	2008年	福　岡
2014年	広　島	2008年	弘　前
2014年	岐　阜	2007年	東　京
2013年	長　崎	2006年	横　浜

出版物

・同文書院記念報（vol.33まで刊行）
・ブックレット（第9巻まで刊行）
・愛知大学創成期の群像　など

愛知大学記念館
愛知大学東亜同文書院大学記念センター

《開館時間》月～金曜日：10 時～16 時 《閉館日》土・日・祝および大学の定める休日